

メッセージアウトライン ヨハネの福音書1:1~18 「人となって来られた神」

[1-3]「初めに、ことばがあった」。「ことば(ロゴス)」とは意思伝達の手段であるが、ここでは神について示す、啓示する存在という意味。

「ことばは神とともにあった」。この「ことば」は神と対等でしかも別個の存在。「ことばは神であった」…「神であることがことばの本質であった」「本質において神と等しかった」という意味。つまり神という本質において一つであるが、なお別の位格を持つ存在。それが「ことば」なのである。

「この方は初めに神とともにおられた」。1節と同様、初めからすでに神とともに存在していたことを意味する。

「すべてのものは、この方によって造られた…」。神は「ことば」によって天地万物を創造された。(創世記1章参照)

[4-5]「この方にいのちがあった」。この方は人間が考え出した死せる、空しい実体のない神ではなく、いのちのあるお方である。「このいのちは人の光であった」。このいのちは人の歩みを正しく導くことのできる光としての働きをする。

「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった」。この世のやみは光に勝つことができない。→ヨハネ12:36、46

[6-8]「神から遣わされたヨハネ」とはバプテスマのヨハネのこと。彼はこの光についてあかしするために来た。→マテ4:5~6、マルコ1:1~8

[9-13]「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた」。ことばなる神の歴史的出現。「この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった」。この方はすべてのものを造り、それらが存在する前からおられたのに世はこの方を知らなかった。→ローマ1:20~25

「この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」。

ご自分の民とはアブラハム以来の神の選びの民イスラエルのこと。しかし、たとえ少数であってもこの方を受け入れた人々、すなわちその名を信じた人々は、神の子どもとされる特権が与えられた。→12節 これは救いの根拠となる重要な聖句である。

「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」。この新しい誕生は全く神の力によるものであって、いかなる人間的な要素によるものでもない。

[14-18]「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」。ことばなる神の受肉、それがクリスマスの出来事。「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから來られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」。これは弟子たちの証言であり、このことはイエスの人格とその働きにはっきりと示されている。ヨハネの証言(15)…ヨハネ1:19~36参照

信じた者たちがこのイエスから受ける恵みは豊かで尽きることがない(16)。

福音は神がモーセによってお与えになった「律法」によって準備され、イエス・キリストによって実現した「恵みとまこと」によって完成される(17)。→ガラテヤ3:21~24

「いまだかつて神を見た者はいない…」(18)。人間の想像や願望、思い込みなどから出て来るものは人間の造りだした偶像の神、実体のない空しい神にすぎない。

人となって来られたことばなる神、イエス・キリストこそ神について正しく教え説き明かし、また人を罪と死と滅びより救うことのできるお方なのである。

そして、イエスが神について、罪について、救いについて教え、説き明かされたことは聖書を読むことによって知り、信じることができるのである。